
国立探偵！助手

Z10

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国立探偵！助手

【NNコード】

N8141M

【作者名】

Z10

【あらすじ】

国立森高校の校長は国立探偵である。日々急がし校長は助手を雇うこととした。選ばれたのは森高一年の北山信之だった。

ストーカー被害（前書き）

クリック感謝です。

ストーカー被害

いつもの時間に家を出て、いつもの席に座る。

「日常とはたいくつだな・・・」北山はため息まじりに呟つた

「なに？朝から暗いな～」

「圭介はいいよな・・・趣味があつて」

「ネトゲだけどな！」

担任が教室に入つてくる、だがいつもより時間が早い。

「北山！校長が呼んでるぞ！」

「校長が？」

「ノブなにやらかしたの？」

「いや・・・思い当たる事はないんだが・・・」

「北山！早く行つて来い！授業なら遅れてもいいからな」

俺は席を立ち教室をあとにした。

コンコン 校長室の扉を叩く

「開いてるよ～」奥から声が聞こえる

「失礼します！」一礼して中に入る

「おはよう、君が北山信之君かな？」

「そうですけど・・・なにか用ですか？」

「まあ・・・单刀直入に言つけど、仕事を頼みたいんだ

「仕事？学生ですよ？」

「知つてるよ、我が校の生徒でしょ？」

「で、仕事つてなにやらせるんですか？」

「実はね、お国直属の探偵なんだよ。こつみても。」

「探偵？」

「そう、國のお偉方や影響力のある方を中心に活動してるんだ。」

「警察や公安の仕事じゃないんですか？」

「そんな難しい仕事じゃないんだ。ようは誰にも知られたくないよ

うなことを解決するのが仕事かな?」

「なぜ俺なんですか?」

「君、剣道式段の腕前なんでしょ?それにちょっと老け顔だし・・・」

「・・・ケンカ売ってるんですか?初段です。」

「まあまあ、それと仕事はね。これを任せたい!」一枚の紙を手渡してくる

「ストーカー被害?」

「そう、なんでも一月前から被害にあつて居るそうだ」

「へ~西警察署長の娘さん?部下に任せたらいのに・・・」

「そう言つわけには、いかんのだろ」

「そんなもんですか?・・・なかなかの美人ですね・・・紙に貼つてある被害者の写真を見て驚く

「だろ?まあ問題は加害者なんだよね・・・」

「・・・加害者の親はその筋の方ですね。」

「そりなんだよ!だから警察も下手に行動できないんだよね。」

「無理です!まだ死にたくありません」

「大丈夫!親がヤーサンでも、息子は関係ない!」

「いやですよ!下手に恨まれても、たまつたもんじやないですよ」

「報酬は50万・・・私の分を引いても40万はあるよ

「!」

「自動車学校にバイクの免許取りに行くんでしょう?これぐらい欲しいじゃないの?」

「なぜそれを・・・やります!やらせてください!」

「話はまとまつた!今日の放課後から頼むよ!」

「一日で解決して見せます!」そう言つと校長室から出て行つた
「本当は30万なんだけどね・・・」

そして放課後

被害者が通つてるのはこここの学校か?お嬢様学校つてかんじだな・・・

30分程待つていると目的の女の子が出てきた。

さて・・尾行開始しますか！

10メートル程後ろから、ついて歩く。

えっと・・被害者の名前は清水希だつたな。

んで加害者の名前が片岡健だな。

こいつの親があの「猛進組」の幹部なんだよな～よりによつて・・

ん？彼女の後ろから小柄な男が近づいて来る。あいつが片岡だな。

「また今日もアイツらの所に行くのか？君は騙されてるんだ！いい加減目を覚ませ！」

腕を掴み彼女を止める。

「いい加減にして！しつこい！毎日毎日！」腕を振り払い歩き出す
「なんや？希またこいつか・・」誰だ？清水さんの彼氏か？絵に描
いたようなチャラ男だな・・

「なんとかしてよ～騎士^{ないしと}追つ払つて」ブ～騎士だ～名前負けもい
いとこだな。

「俺の女に触れるなゆうたやろ！」右手で腹を殴りかかる。
地面に倒れもがき苦しむ、さらに蹴りかかっていたので。さすがに
止めにに入った。

「タケル！どうした！大丈夫か？」

「なんや？知り合いか？」

「ええ・・前に墾で・・」

「お前のダチどないかしとけ！俺の女にストーカーしとるんやぞ！」
「えつ！そななんですか・・すいません、タケルには強く言つとき
ますから・・」

「次おうたら、タダではすまさんからな！」ナイト君は彼女を連れ
て歩き去った

「大丈夫か？無茶するな～」

「キミは誰だ？」前かがみになり問い合わせる

「俺は北山信之！ノブでいいよ。ある友達に頼まれて君を止めにき
たんだ。」嘘だけど

「友達？僕も友達に頼まれて彼女を止めようとしてるんだけど…。
なかなかうまくいかなくてね…」

「ん？友達に頼まれて！」話が違つぞ…

「そつなんだ…彼女タチの悪い連中にそそのかされて、良くない
仕事に手を貸してるんだ…」

「良くない仕事？」

「うん…手作りのお札を高値で中学生や高校生に売つけてるそ
うなんだ…」

「高値つて、1・2万位か？」

「中学生にはその位だろうね…」

「ふむ…ちょっと待つて。」ポケットから携帯を取り出し紙に
書いてあつた番号にかける。

「もしもし松下ですが。」

「校長か？えらく話が違うんですけど…」

校長に状況報告している隙にタケルの姿は消えていた…

不況で取り壊しされてないコンビニ、ここがあにつらのたまり場か。
タケルは割れた窓から中に入る。

「なんや？またオノレカ！」4人の若者が座り込んでいる、真ん中
に大量の金が置かれている。

「彼女を解放してくれ！」

「解放？ふざけたこと言つなよ！ここつは自分の意思でここにおる
んや！」

「そつよ！あんたには関係ないでしょ！消えてよ！」

「メグさんに頼まれたんだ…アンタを止めてほしいって！」

「メグに？お笑いね…あんな組長の娘に言われたくないわ！騎士
！やつちやつてよ～」

騎士が無言でタケルに蹴りかかる。

グッフ…

「なにゆつてんの？耳障りなんだよ！」「ドス！容赦なく腹を蹴る。

「もういいじゃんカラオケでも行こうよ」あれから数10分しか経つてないがタケルは動けない程ボロボロになっていた。

「へつ！口だけかよ。」ペツ！タケルの顔にツバを吐きかける。

「なあナイト？この金でスロットでも行こうぜ！」

「そうだな・・

「えへへ

割れた窓から一人の青年が現れる。

「遅かったか・・タケル無事か？んなわけないか・・

「またオノレかい！そいつ連れて消えろや！」

「まあ・・アンタに言われなくて済めるが・・その前に教育的指導が必要だな・・

近くに落ちてあつた壊れたホウキを手に取る。

「なんじゃい！やるんか！」

素手で飛び掛る相手の喉を突く。

ガアグフオ

「安心しろ・・たぶん死なん！」

「なにさらすんじゃい！」

さらにもう一人が襲い掛かるがホウキでアゴを打ちつけたあと腹を蹴る。

「弱！もつと鍛えなさい。」

倒れこむ相手の背中を踏みつける。

「やるな～これでも昔ボクシングしどったんや！ホウキ野郎に負けんで！」

ファイティングポーズをとり向かって来るが、足元に落ちてあつたブロックを投げつけ顔面にクリーンヒットし倒れこむ。

「まあ・・イラックから一応・・

投げたブロックを手に取り両腕を殴る。

「折れたかな？さて・・あと一人・・」

「こないで！そこのお金半分あげるから！帰つて！」

「ん～魅力的だが・・却下だな」

「私のパパは警察なのよ！これ以上近づいたらパパに言つんだから！」

「安心しろ俺は女性には手を上げない主義なんだ
涙を流しながら震えている。

「・・本当？」

「ああウソじゃない。」

彼女の近くまで来た時、腹を蹴り倒れた所をさらに蹴つた。

「言葉遊びだよ・・アンタもウソついて金もらつたんだろう？お互
い様つつことで」

タケルを肩に抱き窓から出て行く。

「今回はこの程度だが、次は容赦せんぞ！・・それと10代で昔と
か言つなよ恥ずかしい」

タイミングよく外に出た後すぐ校長が来た。

「終わった？」

「任務完了です！」笑顔で答える

「後始末が大変だな・・今日はもう帰つていいよ

「それじゃあ、タケル後部座席に座らせますね。」

「えつ？ダメダメ！その子は任せた！私は娘さんと金を回収したら
帰るの！」

「冗談ですよね・・」

数日後 校長室

「ねえ校長・・約束のお金少くないですか？」

「・・・そりや依頼人の娘さんを病院送りにしたからね～」「
まづかったか」

「最初にしては上出来だよ、1日で20万稼いだんだから文句言つ

なよ・・

「くつ後味悪いな～あの後どうなったんですか？」

「全力でもみ消したよ。お金も被害者に色を付けて返したし。」

「ふむ・・タケルは？」

「第一西部病院で入院中だよ」

「見舞いにでも行つてやるかな？」

「ん～まあいいけど、彼退院したら我が校に編入するよ？」

「なぜに？」

「今のお学校でいろいろあつたみたいだね。ちなみにキリのクラスね

「・・・えつ-----！」

ストーカー被害（後書き）

読破感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8141m/>

国立探偵！助手

2010年10月11日18時50分発行